



Title	多義的なメディア見本市通信 (Messrelation) : その成立と変質について
Author(s)	江口, 豊; EGUCHI, Yutaka
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 25, 75-92
Issue Date	2017-10-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67620
Type	departmental bulletin paper
File Information	075.-092-05_eguchi.pdf



多義的なメディア見本市 通信 (Messrelation)

—その成立と変質について—

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 教授

江口 豊

An ambiguous Media Messrelation — On his emergence and change —

EGUCHI Yutaka

abstract

The Messrelation is the first periodical printed news media. The handwritten news were already in the 16th. Century circulated in the vast middle and west Europe. But they still remain not printed and not of periodical nature. The so-called "Einblattdrucke", fliers were also not periodical. In 1583 a humanist named Michael von Aitzing, from an Austrian aristocratic family published at first time a gathering of news of the last several months, however in his opinion a chronicle of the contemporary history. This ambiguity of the new sort of printing was retained several decades till in to the 17th. Century. After the emergence of a weekly newspaper 1605 in Strasbourg the Messrelation got more the third character i.e. the aspect of an almanac. The actuality and the periodicity were then the central features of other media like newspaper. The printing cities of the Messrelations as Cologne, Frankfurt, Leipzig and Basel had all the Protestant majority or were at least in a competing situation between the two churches. That could be a meaningful coincidence.

0 | 序

最初の印刷形態の週刊新聞は1605年にストラスブールでヨハン・カロルスにより刊行されたと推定されている。カロルスの個人的な事業背景と思いつきとの結びつきによって「一つの飛躍」が発生し、それまでも一種の情報市場でやり取りされたニュースが手書きではなく印刷された形態で販売されるようになったと考えられる。21世紀の今いささか斜陽の印象もあるものの、世界中で新聞が制作され読まれるに至る原点がここにある。江口 (2017) では活字で印刷された新聞が登場するニュース流通の前段階としての手書き通信について論じたが、16世紀から17世紀にかけて印刷物としてもいくつか新聞に先駆けるようなものが存在した。その一つが見本市通信 (Messrelation) である。

ドイツ語圏でも見本市通信に関する研究は、19世紀に制作者に関する詳細な調査も含め、いくつかの成果が示され、20世紀以降も篤学の研究者により検討が加えられている。その一つの頂点と見られるのがBender (1994) による見本市通信の目録作成である。ブレーメン大学の印刷メディア歴史研究所でのメディア史研究の一環として最近も成果が公にされている。それらを概観しつつ、新聞成立に果たしたこの印刷媒体の成立の経緯、意義や変遷などを検討することが小論の目的である。

1 | 見本市通信とは何か

1.1 見本市通信の概要

見本市通信 (Messrelation) とは、後に詳しく紹介するMichael von Aitzing (1530?-1598) により1583年秋に最初に„RELATIO HISTORICA“として刊行された。その後連続して、かつ複数が同時に競合するかたちで刊行された印刷物で、ある時期からはほぼ定期的に刊行、販売されたものである。刊行間隔は原則半年、すなわち年に2回 (春と秋) もしくは3回 (春、秋に加えて新年) であり、一部の見本市通信に「半年ごとの」を意味するsemestrigという形容詞が付されていることもこれを裏付けている。ただし、見本市通信の著者、制作者としては、Michael von Aitzing以外にも複数の名前が挙げられており、印刷地もケルン、「フランクフルトとその周辺、それ以外にもアシャッフエンブルク、エアフルト、ハレ、ハイデルベルク、マクデブルク、ストラスブールなど」多数が確認されている (Körber 2016, 19.)。注目すべき点としては、見本市通信が長命であったことであり、1583年秋以降、最終的に1805年まで存続した。また1605年以降にライプツィヒで刊行されたものは、1730年ま

で継続した」(Rosseaux 2004, 98f.および100.)。

見本市通信は「フランクフルトやライプツィヒなどで」開催される「書籍見本市」に合わせて刊行されたもので、「ヨーロッパ初の印刷定期行物であり、後の印刷新聞の先駆形態と見なせる」。「定期性、印刷、汎性的報道(報道内容の非限定性)」を備えており、週刊新聞以前ではもっとも発達したニュースメディアだとしている(Bender 1994, VII)。「前回の見本市以降の半年間の重大な事件に関し集められた報道と記録」が内容である(Bender 1994, VII)。

見本市通信は通常四つ折り版(ほぼ現在のドイツ工業規格A5版大)で、全紙で表裏にそれぞれ4ページずつ印刷する前提で、全紙で2枚から20枚、つまり16ページから160ページまで長さには幅があるが、平均的なもので全紙12枚、タイトルページや目次、前書きを含め96ページ規模が最も多かったとされる。また同時代のパンフレット同様綴じられず冊子のまま販売された(所有者が製本させることは当然あった)(Körber 2016, 11f.)。この長さや情報量は、印刷物としては暦を除けば傑出したものだった。チラシやNeue Zeitungと呼ばれた不定期のニュースは、せいぜい全紙1枚つまり8ページ止まりだったからである(Körber 2016, 12.)。

1.2 見本市通信の内容

1583年にフランクフルトで販売された„RELATIO HISTORICA“と題された見本市通信の第1号とされるものは144ページで、内容は主に3項目からなっている。1) 1580年2月以降のオランダ情勢、2) ケルン大司教で選帝侯のGebhard Truchseß von Waldburgによるケルンでの宗教改革の試みとその後に1582年から1583年まで続いたケルン戦争、3) 1581年5月のプロテスタント勢力によるアーヘン市参事会選挙勝利による情勢緊迫の三つである(Rosseaux 2004, 100f.)。

第1号の内容が象徴的に示しているように、見本市通信の報道の中心は政治、軍事上の事件であったが、それに限定されてもいない。「軍事的な事件、政治家や政治機構(例えば都市や諸侯会議)の発言、経済的に重要な出来事(高価な積み荷の商船の到着、海賊による乗っ取り、硬貨の切り下げ、硬貨に関する勅令など)、聖年や宗教改革記念などの特別な宗教的催し、他界した政治家や学者の訃報、事故、火災、自然災害、犯罪とそれに対する刑罰、人間的な悲劇や勝利、彗星現象のような世間の耳目を集める出来事、…打ち上げられた鯨とかシャム双生児の誕生、…狩、射撃コンクール、騎馬試合などのスポーツ」も記載された(Körber 2016, 11.)。「政治的なニュース」の例では「戦闘行為にかかわる出来事や和平の締結、外交使節の入国や出国、就任の儀式、…重要な軍事・宮廷ポストの任命、宮廷の祝祭など、国家元首や宮廷官吏の旅行、宮廷や高位貴族の結婚、生誕、死亡」が挙げられている(Körber 2016, 25.)。

この印刷物の見本市通信(Messrelation)という名前の由来は「見本市(Messe)に合わせた刊行のタイミング」と「通信・報告(Relation)という命名」による(Bender 1994, VII)。見本市通信の編集人の一人であるMichael Kaspar Lunderpが1620年に「見本市に合わせた報告」という言い方を使用し、さらに別

の編集人Johann Peter Ludwigが1700年に「Meß-relaciones」という表現を当てて、今日に至っている (Bender 1994, VII)。

1.3 見本市通信のニュースソース

「見本市通信の基盤となる情報源について分かっているのは、主として大規模な商業拠点、官庁、宮廷など巡っていた書簡、また諸侯や商人に宛てられていた手紙で、定期的もしくは突発的に通信員から発せられたものから成り立っていた」Stalljohann (2011, 117.)。しかし、見本市通信の編集者が利用したニュースソースは書簡や通信類ばかりではない。「よく利用されたものに、公的な契約・協定、公的な通信や交換文書、平和交渉や協定に関する交換書簡やその文言などの公文書も含まれた」(Stalljohann 2011, 123.)。さらに「ニュースや記事の大部分はすでにパンフレット、イラスト付きのチラシ、通信として公にされたものだったので、…所謂著者の役割の大部分は、前回の見本市の時点から集められたニュースの収集、選択、編集の点にあった」ため、「著者というよりも編集者、編集人、编者という呼び方が適切である」Stalljohann (2011, 118.)。小論でも以下「編集人」とする。

2 Bender (1987) による見本市通信の 目録作成

見本市通信に関わった編集人、印刷人、発行人などが多岐にわたっていたことは後に詳述するが、当時よく見られたように発行人等のデータを明示せずに刊行されたものも存在し、全体像を把握するのは非常に困難といわざるをえない。現在各地の図書館や文書館などに分散している見本市通信について最初に整理し、全体像を示したのがBender (1994) である。もちろん、それ以前にもフランクフルトで刊行されたものを論じたSchwarzkopf¹⁾、内容の分析をした上にライプツィヒの見本市通信についても概観を述べたPrutz²⁾、見本市通信の創始者であるAitzingについて詳しく論じたStieve (1881) など、主としてジャーナリズム史との関連で見本市通信を論じた研究が存在する一方で、見本市通信の本質を18世紀に至るまで歴史記述のための資料編纂として捉えたBingel³⁾ のような研究者も存在した (Bender 1987, 62f.)。

こうした見本市通信研究史のなかで、画期的な目録を提示したBender (1994) であるが、その問題点も指摘されている。Rosseaux (2001, 53ff.) は、1620年から1624年の見本市通信を調査したが、Bender (1994) の見本市通信の目録について、(1) 匿名で刊行されたものを他の既知の版と同一だとしている、(2) 編集者名について安易にタイトルなどに挙げられた名前と同一視している、(3) 内容に関わる表示がない (形式上版が異なるとされても、内容上同一なケースもあるため) ことの三点を問題として挙げている。

このうち、タイトルについて、KörberはBenderの書誌的整理が「直接の徹底した自己検分に基づいた信頼のおけるもの」と評価しながらも、長文のタ

- ▶1 Joachim von Schwarzkopf (1802) Über politische und gelehrte Zeitungen, Meßrelation-en, Intelligenzblätter und über Flugschriftenzu Frankfurt am Mayn. Ein Beytrag zu der Geschichte dieser Reichs-Stadt. Zuerst erschienen als Anhang zur Messrelation Herbst 1801.
- ▶2 Robert Eduard Prutz (1845) Geschichte des deutschen Journalismus. Hannover.
- ▶3 Hermann Bingel (1909) Das Theatrum Europaeum. Ein Beitrag zur Publizistik des 17. und 18. Jahrhunderts. Wiesbaden.

イトルの詳細な検討を通じた書誌上の「二つの問題」を指摘している。そのひとつは「短いタイトルは見本市通信の冊子そのものの確定には不十分であり」、非常に長い「完全なタイトル」を検討する必要があるという指摘である。さらに、著者名に関しても著者名のみ表記される場合と著者名の主体に前置詞durchが冠せられたヴァリエーションがあるなど、いわば版の特定が容易ではない場合が存在する (Körber 2015, 13.)。

3 見本市通信の創始者と 模倣者・後継者たち

上に述べた事情を端的に示しているのが1610年頃までの見本市通信の発行地、編集人、印刷人、発行人などを整理した次頁の表1である。この表や実際の見本市通信の形式・構成や内容などを見ると、特に16世紀の成立・拡張期には、当然異質な思惑や背景が想定できることが分かる。

多くの研究でも見本市通信については編集人 (Kompilator) という用語を使用している。それは見本市通信が第三者の情報源から入手したニュースを蓄積、整理していわば半年分を読み物として印刷していたからである。16世紀当時の印刷事情から著者と発行人、印刷人との間にいろいろな力関係が働き、著者 (この場合は編集人) だけが決定権を持っていたわけではないことには留意しなければならない。以下に編集人として名前が明らかになっているケースをいくつか取り上げるが、それは編集人の氏名や筆名が当該の見本市通信シリーズと結び付けられることもあったからである。⁴⁾

▶4 Körber (2016, 39f.) は、同一の発行人、印刷人、編集人が発行した見本市通信について一つのシリーズ (Messrelationsreihe) という概念を充てている。

3.1 Michael von Aitzing

Michael von Aitzingは1530年頃 (生年不明) にオーストリアの貴族の家系に生まれ、ウィーンとルーヴアの大学で法律と数学を学び、数年間の宮廷出仕を経験した。宮廷勤務期間中には1563年公会議開催時にトリエントを訪ねたこともある。1576年皇帝ルードルフ2世に宮廷官吏としての任用の更新を拒絶され、オランダに留まった。1581年にケルンに移り住むまで、20年以上オランダ生活を経験している (Rosseaux 2004, 103.)。初期には修辞論、数学、調和論 (Harmonielehre) に関する著作やハプスブルク家に諂うようなものを公刊したが、真に名を成したのは多くの銅版画の挿絵を取り込みラテン語で著された1581年刊行の„Leo Belgucus“という1559年以降のオランダ情勢を記述したものである。この著作は16世紀の書籍市場でただならぬ成功を収めたと評されている。比較的高価であったが1583年には第三版を重ねた。印象的なタイトルの元となったのは、オランダ地図のイラストであり、それがライオン (Leo) の輪郭を示していたことで付けられた書名である (Rosseaux 2004, 103f.)。Aitzingは„Leo Belgucus“の好評を受けて、そのヴァリエーションとして1584年ドイツ語で『オランダ記』 „Niederländische Beschreibung“を刊行した。同書は低価格で販売するために銅版画を除いて出版した (Rosseaux

表1 印刷新聞発生時までの見本市通信の発行例および先駆印刷物の展開

発行地	発行人	印刷人	編集人	発行期間
Basel	?	?	詩人T. M.?	1576年春
Köln	G. von Kempen		M. von Aitzing	1583年秋～1597年
Köln	Schreiber/Kempen		W. Riephan	1592年/1593年～1597年
Köln	Schreiber/Lützenkirchen		C. Löw	1593年春/1593年秋～1596年
Köln	G. Grevenbroich		M. von Aitzing	1597年
Köln	S. Pauwls?	H. Hoberg	A. Salerius	1598年
Köln	P. Brachel		C. Löw/C. Ens	1601年春～1642年
Straßburg	?	?	T. Steger	1590年秋～1591年
Frankfurt (Oberursel)	Brachfeld	N. Henricus/ C. Sutor	<i>Jacobus Francus</i> (C. Lauthenbach J. Bongars S. Brenner)	1591年春～
Frankfurt	Latomus	C. Sutor usw.	<i>Meurer</i> <i>Jacobus Francus</i>	1599年～ 1603年～
Magdeburg	J. Francke		<i>Frame</i>	
Leipzig	A. Lamberg	?	H. Megiser/?	1605年
Leipzig	A. Lamberg/ G. Grosse usw.	H. Köhler	<i>G. Wintermonat</i> (G. Winter)	1606年～ (1730年)

*Bender (1994) およびKörber (2016) に基づき作成 (イタリックは偽名を含む筆名)

2004, 104.)。

1584年のフランクフルト見本市のカタログには、「Leo Belgucus」、*„Niederländische Beschreibung“*、*„RELATIO HISTORICA“*の三点が掲載されている (Rosseaux 2004, 104f.)。当時の著作の前書きの記載などから、Michael von Aitzingは自身のことを歴史著述家と自覚し、その著作を同時代史の史料編纂、歴史記述 (Historiographie) と見なしていた。彼にとっての模範はJohann Sleidanであったらしい。そして「主題の選択と素材の配置が、Sleidanのそれと注目すべき一致を示している。…両者ともに広く客観的な情報を求めて、年代順に配列した、比較的新しい政治、宗教、軍事の事件史を提示した」 (Rosseaux 2004, 105.)。また、Johann SleidanとMichael von Aitzingの二人の履歴にも類似点がある。Johann Sleidanはルーヴェン、ケルン、パリ、オルレアンの各大学で学び、Jean du Bellay枢機卿の下でフランスの委託で神聖ローマ帝国のプロテスタント諸侯との外交交渉にあたった。1551年の公会議にストラスブール市の暫定的な代理としてトリエントへ旅し、北イタリアとベネツィアの印象を胸に刻んでいる (Rosseaux 2004, 106.)。両者ともに多くの貴重な情報にアクセスできる環境に身を置き、その情報を適切に評価し、処理する能力を教育により身につけていた (Rosseaux 2004, 106.)。「二人は (時代の) あらゆる重要なことを知ることができる程度には近い立場にはいたが、そうしたことに巻き込まれ、党派的な立場をとるところからは十分に距離をおけた」と考えることもできる。しかし、カトリック信徒を公言していたAitzingが著述家として成功したことで、後にプロテスタントであり、著作の客観性と中立性に努めたSleidanとの相違を示すようになる (Rosseaux 2004, 106.)。両者の書籍としての成功の背景には、「ラテン語著作のヴァリエーションとしてドイツ語で書くことで、…アカデミックな学者たちの階層を超えて受け入

れられた」のは、「時代の経過について可能な限り詳細な情報を求める実際的な関心」があったためと考えられている（Rosseaux 2004, 107.）。

3.2 模倣者・後継者たち

1583年にAitzing編集による見本市通信„RELATIO HISTORICA“が大きな反響を呼び、出版物としても商業的に成功した。これを受け、Aitzing自身が1584年に„Historische Beschreibung“、1586年には„Kurzer Historischer Begriff vnd Inhalt“を発行した。ただしAitzing自身には事件等の継続的な報告を目的として出版に携わっているという自覚がなかったことは複数の研究者に指摘されている通りである。そして、実質的な見本市通信の継続的刊行の端緒とされるものは、1588年春の„POSTREMA RELATIO“とその後の続編を待たねばならない。いずれにせよ、こうしたAitzingの成功が数多くの模倣者を生じさせることになる。編集人や発行人、印刷人にとって、安定的な収入を保証してくれる継続的な印刷物は垂涎の的であったことは、江口（2014）でも論じた通りである。

見本市通信の継続、模倣の動きは、Aitzingが編集、著作活動をしていたケルンで、さらに書籍見本市の会場を擁していたフランクフルトとその周辺で、また第二の見本市会場都市であったライプツィヒとそれ以外の諸都市へと広まった。そうした見本市通信の拡散状況を印刷新聞成立期までに限定して、代表的なものをまとめてみる。

(1) ケルン

ケルンでは、最初にAitzingと共同したGottfried von Kempenという印刷人兼発行人がいたが、彼は別の編集人Wilhelm Riephanとも並行して見本市通信を制作していたことが判明している。そしてこの編集人Riephanも別の発行人兼印刷人Nikolaus Schreiberと見本市通信を発行した。Riephanはその後Wilhelm von Lützenkirchenという別の発行人兼印刷人とも組んで見本市通信を発行している。さらにはまた編集人Conrad LöwがこのLützenkirchenと組むということも起こるなど、目まぐるしい離合集散が起こっている。創始者であるAitzingでさえ、Gerhard Grevenbroichという発行人兼印刷人と1597年に協働していて、常に同一の発行人や出版人と協働していたわけではない。これに加えて、「1605年春から1616年春までケルンの見本市通信の一部は、印刷地と印刷人の記載なしで出版された」ように、関与した人物が確認できないケースもある（Körber 2016, 74.）。

(2) フランクフルト

Aitzingの成功を受け、発行人Paul Brachfeldの下で1591年にJacobus Francusの筆名で見本市通信を編集したのが、フランクフルトのルター派神学者で牧師Conrad Lautenbachだったことは比較的よく知られている。このJacobus Francusの編集人名で刊行された見本市通信も相当の成功を収めたが、Lautenbachは1594年まで編集をして1595年に死亡していることから、編集人は彼一人に限らないことも判明している。二人目の編集人として名前が挙げられているのがフランスの外交官Jacques Bongarsで、筆名のJacobus Francusとファーストネームが一致することと、フランス人（Franzose）という表現が

Francusに結び付けられている。三人目に挙げられるのがSebastian Brennerというバイエルン出身で、フランクフルト市の市民権獲得のためにカトリックからプロテスタントへ改宗した人物である (Körber 2016, 91ff.)。

フランクフルトでは、Brachfeldの死後、おそらく1603年頃にその書籍取引業を引き継いだ前後から、Jacobus Francusの編集人名を冠した見本市通信と別の編集人Meurerの名を冠したものがSigismund Latomusやその妻Anna Katharinaなどによって継続して刊行された。Latomusを巡っては、Andreas StriegelやJohann Franckeなど他の発行人、印刷人なども入り乱れて、いわば見本市通信の市場を巡る競合が展開された。一時的にLatomus夫妻は見本市通信を同時に5種類のバリエーションで発行するなどして、競合相手を市場から駆逐しようとした。さらにAnna Katharinaは1627年4月13日付けの皇帝による印刷特権を受けること (当時の規定で4部の見本市通信を宮廷官房に提出) でさらに地盤を固めた。Latomusは、印刷監督への配慮と当時 (三十年戦争の発生前後) の新旧両派の宗派对立への配慮を意識して、所謂「記録文書の文体」あるいは「宮廷文体」により中立的公平な文体を確立していく。これは経営上の施策と相まって結果的に多くの読者を獲得することにつながったと見られている (Körber 2016, 139-167.)。最終的にフランクフルトでの見本市通信は19世紀初頭 (1805年) まで継続された。

(3) ライプツィヒ⁵⁾

ライプツィヒでは、見本市通信が厳しい競合や注意すべき政治環境の変化にさらされることは他のケルンやフランクフルトのような都市ほどではなかったようである (Körber 2016, 185.)。1605年春に印刷人兼発行人Abraham Lambergと編集人Hieronymus Megiserが同地で最初に公認の見本市通信を発行したことは、ザクセン選帝公の書籍委員会の記録で判明している (Körber 2016, 185.)。Megiserがライプツィヒを1605年に離れ、彼の後任がGregorius Wintermonatという筆名で発行を継続している (Körber 2016, 186.)。また他の都市との違いとして特記すべきことは、1609年以降に新年版の見本市通信が刊行されたことで年3回の発行リズムが成立した点である (Körber 2016, 190.)。

上記三都市以外でも、例えばマクデブルクで1593年新年版の見本市通信が複製出版 (海賊版) されて流通し、1605年以前のライプツィヒでも複製出版のケースがあったことをKörber (2016, 109f.) が指摘している。主たる発行地はすべてプロテスタント勢力が多数派か、少なくとも当時は新教・旧教が拮抗していた地域であったことは偶然であろうか。

見本市通信が比較的広範に受け容れられた理由

Aitzingは1597年秋に自身の最後の見本市通信を発行した後、1598年始めにボンで没し、Jacobus FrancusとConrad Lautenbachもそれ以前に死亡したが、フランクフルトでもケルンでも見本市通信は発行され続けた。ライプツィヒや他のいくつかの都市でも続く者があった (表1参照)。これらに共通するのは、(1) 客観的で堅実な情報を見やすく扱いやすい形で提示している、(2) 過去6ヶ月間のもっとも重要な出来事を含む、(3) 個別のニュースにアクセスできるよう、時間軸に沿って並べ、簡潔な表現でニュース本体の内容を告

▶5 Quentin (1941) Die Leipziger Meßrelationen. Ein Beitrag zur Geschichte des ältesten deutschen Zeitungswesens. Diss. Leipzig. (masch.)

示している、の三点であろう (Rosseaux 2004, 118f.)。

3.3 見本市通信の先駆と考えられる印刷物の存在

1583年に発行されたものが嚆矢とされる見本市通信であるが、1576年にスイスのバーゼルで発行された印刷物がその先駆ではないかという指摘がされている。それは「不十分な分類基準のため蔵書整理上「パンフレット」と分類されてきたものだが、タイトルからしてすでに、後の見本市通信のように報道対象領域を挙げていて、フランクフルト見本市に向けられているとも取れる」(Körber 2016, 41.)。取材対象地域は「ドイツとフランス」だけであるが、「ニュースを月ごとにまとめており、ニュースを太字で印字された月名により整理している」。また、「この印刷物も、手書き通信に由来すると考えられるニュースや訓令書と統治者による書類を収めている」ことが判明している (Körber 2016, 42.)。さらに、「この印刷物の末尾にニュースの編集人は、彼の仕事の継続と、加えて地理的な範囲の拡大すら約束している」(Körber 2016, 42f.)。

「新たなポーランド国王の選出、オランダでの出来事についても、
親愛なる読者よ、我々は次回にお伝えしよう」(Körber 2016, 43.)

このバーゼルの印刷物の編集人については、「アンリ3世について嘲笑する詩を著した」「博識ある詩人T. M.」という頭文字にヒントがあるという指摘もある (Körber 2016, 43.)。

なぜこの印刷物を見本市通信の先駆と見ることができるのかについて、Körberが挙げている根拠は、(1) 上に紹介した内容と構成、(2) アウクスブルクで刊行されたシリーズものの通信 (Serienzeitungen)⁶⁾ の存在とそれを知るルートとしてのケルン・アウクスブルク間のタクシス郵便ルートの存在、(3) ケルン・バーゼル間の情報・物資流通経路としてのライン川の存在 (陸路に比べ輸送コストは十分の一)、(4) バーゼルと地理的に非常に近いストラスブールでTobias Stegerにより編集方針も記述方針もよく似た見本市通信が存在したこと、そして、その性格は見本市通信のAitzingのものとは異なること (因みにStegerの見本市通信の初出は1590年秋である) の四点である (Körber 2016, 43ff.)。

▶6 Serienzeitungは、もっぱらトルコ戦役について不定期で継続して伝えたものとされている (Körber 2016, 42.)。

4 見本市通信の成立と変質

4.1 歴史記述なのか報道なのか

従来の研究で問題にされた点に、「見本市通信は印刷新聞の先駆形態もしくは変種か」という問いかけがある。さらには、「17世紀末にドイツ語圏に現れる雑誌との関連はあるか」ということも問題にされることがある (Rosseaux (2004, 100f.)。Rosseaux自身は簡潔に以下のような整理された解答を与え、間接的に見本市通信の独自性を指摘している。

- ・200年余り維持されたことから「先駆形態」とは言いにくい
- ・速報性・即時性で大きな相違があるため変種ともいえない
- ・政治・軍事への偏重はあっても見本市通信は原則的に非限定的 (universal) で、主題限定を当然とする雑誌とは同一視できない

見本市通信は個別ニュースを原則半年分集めて編集するという印刷物であるが、事象の取捨選択と提示の仕方、さらにはニュースに関するコメント次第で内容の性格は大きく変わりうる。17世紀始めの新聞成立に不可欠な要件としての定期的な駅通制度の整備を指摘したBehringer (2003) も見本市通信に言及しているが、Behringerの記述は必ずしも説得力のある点ばかりではない。見本市通信の周期性については、「Neue Zeitungや連続ニュースと比較して、周期性を根拠とするのではなく、ニュースの取り扱いを根拠にすれば、見本市通信が定期的ニュース刊行物の先駆者と見ることができる」と述べ、報じたニュースの性格に着目している (Behringer 2003, 310.)。

しかし、第3章で紹介した通り、見本市通信は200年以上もの長期に亘り存在したメディアであるばかりでなく、成立して形式上、内容上固定化するまでの段階でも様々な人々が制作・発行に携っている。まずAitzing個人と情報媒体としての見本市通信とを一体化してみることに大きな無理があるといえよう。Körber (2016) などの詳細な研究から読み取れる媒体そのものの変質だけでなく編集人個人の変質も踏まえて、全体像を描く必要がある。Körber (2013) でも、主に (1) 見本市通信の連続性もしくは周期性がどのような経緯で与えられたのか、あるいはAitzing自身がそれについてどう考えていたかという点、(2) Aitzingの見本市通信に添えられる「即物性、無味乾燥性、不偏不党性」という評価、その背後にある (3) 世界観と歴史観を問題にしている。

4.1.1 BehringerらのAitzing観

Behringerが「Aitzinger (=Aitzing) には歴史的な事件への偏愛があった」ことに触れている (Behringer 2003, 310.) ように、Aitzing自身も自らを同時代の歴史を記録するChronist (歴史記述者) もしくはHistoriograph (資料編纂者) という意識が強かったという見方がよく示されている。また、事件の記述にあたっての立場の中立性についても、「カトリック信徒としてオランダの自由を求める努力には共感を示しながらも、カルヴァン派の聖像廃棄運動や北部諸州の反乱にはそうしなかったことで、新旧両派の狭間に立つこととなった」と、その根拠を見出そうとしている (Behringer 2003, 311.)。またそうした立場の思想的背景として、「Aitzingerは、彼の父が仕えたフェルディナント1世やマクシミリアン2世治下のウィーン宮廷の宗派融和的な雰囲気に影響されていた。彼はウィーン、ルーヴアン、トリエント、ブリュッセルでの軍事的な反宗教改革の始まりを体験したが、その宗教的熱狂を好きにはなれなかった。オランダにおける宗派融和に立つ党派の失敗を示すマッティアス大公 (彼の父が洗礼時の代父を務めた) の退位により、Aitzingerもオランダを離れることとなった。」と説明している (Behringer 2003, 311.)。さらに、「Aitzingerは自らがカトリック信徒であることを公言していたが、…彼の信仰

は、対立や神学論争上の緊張にもかかわらず、彼の叙述には決して影響していなかった。」と見本市通信の本格的研究の嚆矢と目されるStieve (1881, 208) にその根拠を求めている。「信仰は個人的な問題であり、歴史家の仕事は信仰上の中立性の成すところである」。「事実、彼のオランダ現代史は大部分公文書の記録」から成り立っていて、それにより広範な史料編纂の性格をもっていた。後世の書評家たちがこの見本市通信に『単調で無味乾燥な』という評価を与えたとしても、それがちょうど大道商人的なイラストつきニュースや一枚刷りを背景に置くことでその魅力となっていた」と、歴史記述の中立性の長所に注目している (Behringer 2003, 312.)。つまり、「Aitzingerの信条に従えば、判断は本来読者に委ねるべきものだ」ということになる (Behringer 2003, 312.)。⁷⁾

▶7 歴史記述としての見本市通信というAitzingerの立場が後世にも影響した例として「1620年代に歴史通信を編集したMichael Kaspar Lundorpも、Continuatio Sleidani“を三巻本で1614年から1619年の間に刊行している」ことを挙げている (Rosseaux 2004, 122.)。

4.1.2 見本市通信に対するAitzinger自身の見方の変質

Aitzingerにとっての見本市通信の嚆矢は1583年に刊行された、RELATIO HISTORIA“であるが、当初彼自身にこれを半年に一度継続して発行しようという意図はなかった。本来は現代史資料の編纂作業と理解されていたものが、現代事件の報告の編集刊行物で、しかも継続して出版されるものという理解に変質したとRosseauxは推測している。

Rosseauxによれば、Aitzingerのラテン語でのオランダ現代史書、Leo Belgicus“でも、1585年から1588年まで毎年改訂され、最新の出来事が補足されている (Rosseaux 2004, 112.) が、記述の完結、終結を目指した連続出版であって、時間軸に沿った完成形という目標を持たない継続的刊行物という意図ではなかった。また、同時期にドイツ語で記述された「現代史書」4点でも、「継続的で定期的な意図をもってのことであるという示唆は見られない」 (Rosseaux 2004, 112f.)。また、1588年の刊行物の記述からは「それまでに刊行された二冊の見本市通信に加えてさらに四冊目を刊行しようという意図が話題にはなっていない」ことから、「Aitzingerが1588年以前に彼の見本市通信を定期刊行物として意図していなかった」ことが分かるのである (Rosseaux 2004, 113.)。もちろん「定期刊行物への移行は自明のことではないし、当然のことでもなかったであろう」 (Körber 2016, 54.)。

そして、「定期的に刊行されたメディア形式としての見本市通信は、Aitzingerが1588年秋に、POSTREMA RELATIO“の、APPENDIX“を刊行してから”であり、1589年春のフランクフルト見本市にはいわば「補遺」の「補遺」が刊行され、同年秋には、タイトル、RELATIONIS HISTORICAE CONTINUATIO“ (歴史報告継続) として刊行され、ここで初めて「Aitzingerは自分の『歴史報告』を明らかに継続的な刊行物と見ていた」ことになる (Rosseaux 2004, 114.)。これを裏付けるように、「Aitzingerは見本市通信の巻末に次号が公刊される簡潔な告示を記載し始めた」 (Rosseaux 2004, 114.)。また、「本来当該の見本市通信で論じるつもりであったテーマは次号で公にすることになる」旨述べたり、その原因を印刷業者に帰したりしている (Rosseaux 2004, 114f.)。

これに対してKörber (2016) は、Aitzingerにもともと両義的な態度があると解している。彼女は「選帝公でもあるケルン大司教エルンストという後援者

を經由したものが多数であるが、もっぱら公文書から二つの書物, „Historische Beschreibung“と, „RELATIO HISTORICA“を著したものの、…その構成原理として、出来事の編年記というものを適用していた。…両書の性格は何かという問いに対しては……それは当然史書であるはずだ」と確認する (Körber 2016, 48.)。また、16世紀に手書き通信というニュース媒体が流通していたが、Aitzingは自分の「歴史書」の文体・構成をそれとは異にすることで歴史著述家という自己認識を示していたとKörberは指摘する (Körber 2016, 49.)。付言すると、ケルンで1593年にConrad Löwにより編集されていた見本市通信は、手書き通信の文体と構成を取り入れていた。

その一方で、„Historische Beschreibung“の前書き⁸⁾には「昨日の出来事」という表現を用いているものの、ここでの昨日 (gestern) の意味を文字通りには解釈すべきではないとする。そして「つい昨日起こったこと」の意味として、「日替わりのニュース報道も知らない、…狭い地域を超えた知らせが発生場所から受け手まで届くのに数週間、場合によっては数カ月かかる時代」においては、最新の出来事への関心を示していると解釈する (Körber 2016, 49.)。またhistorisch/historicusという形容詞が、「どれほど時間的に遡るのかとは無関係に、観察可能なこと、観察されたこと」を意味し、「時間的な距離は問題にならず」、「主観的にでっち上げられた『御伽噺』や神の啓示でなければ、最新の報告でも古く遡る報告でもhistorisch/historicusとなりうる」と主張する (Körber 2016, 49.)。

先にBehringerやStieveが³⁾、Aitzingの文体を「単調で無味乾燥な」とも評価し、即物的、不偏不党、公平中立とも言っていることを紹介した。その根拠として二点が紹介された。それが (1) 新旧両派融和論者 (Ireniker) との想定もしくはそうした立場の人々との交流や共同作業と、(2) 歴史記述という立場からの要請であったとされてきた。しかし、Körber (2016) の研究は、Aitzingがカトリック教徒としての自覚を明確に持ち、「新教徒とは一線を画し、彼らを軽侮していた」証拠に、「非カトリック的」以外にも「邪教徒 (Ketzer)」や「邪教的」の表現を使用し、カトリック教会からの「離反、背反 (Abfall)」もよく用いていたことを紹介している。こうした表現の背後には「Aitzingが戦う教会 (ecclesia militans) という視点から彼の時代の歴史を意識的かつ徹底的に解釈していた」ことが読み取れるのであり、これはBehringerやStieveの見方を真っ向から否定するものである (Körber 2016, 51f.)。他にも、サヴォイ公のジュネーヴ攻撃やオランダ独立戦争、スペイン無敵艦隊の敗北についても一方的にカトリック側に立った記述が紹介されている (Körber 2016, 49.)。「Aitzingにとっての不偏不党とは、(現代的な理解とは違い) 評価の放棄を意味してはなかった」のである (Körber 2016, 54.)。そして「彼が『(手書き) 通信の記者』としてではなく、まさに歴史記述者という自覚をもっていたからこそ『無味乾燥な報告』を書けなかったのだ」というのがKörberの説明である (Körber同上.)。

▶8 Bender (1987, 64.) は、「見本市通信の前書きは活字メディア史の研究者にとっての宝庫である。そこには、自分をどう捉えているのか、自らの動機、問題と困難の数々、ニュースの入手先や性格、そして読者について編集者たちの発言が含まれている」と述べている。

4.1.3 変質の原因

上に述べたとおり、見本市通信 (Messrelation) という名前で一括りにされ

る媒体が複数の人の関与を受け、複数の場所で制作されていたこと、創始者とされるAitzingでさえ1588年まで定期的な継続刊行物を制作しているという自覚も動機もなかったことは推定できた。もちろんそこに、現代史の資料編纂あるいは歴史記述をしていたはずのAitzingに別種の動機や意識を持たせる要因が生じたのだが、その要因と考えられるものについて、以下にKörber (2016) などに基づいて検討してみたい。

編集人Kempenの意向

定期性を備えた刊行物としての見本市通信の「普遍的なニュース総覧というイメージは、おそらく印刷人兼発行人Gottfried von Kempenにより展開された」とKörberは推定している (Körber 2016, 57.)。Kempenは、Aitzingに見本市通信を編集させるのと並行して、1593年からであるが、帝国公証人であった別の編集人Wilhelm Riephanとも共同して、„Epitome“という見本市通信の続編を制作した。「見本市通信に関するKempenとAitzingの考えには不一致があった」のに対して、「Riephanが普遍的なニュースの総覧という発想に寛容だったことが発行人としてのKempenには非常に重要だった」とKörberは指摘している (Körber 2016, 60.)。その結果、「Aitzingはほとんど頑固に総括的な年代記というアイデアを追い求めて、Kempenが求めたニュースの総覧を提供できなかった」(Körber 2016, 59.)。それに対して「Riephanの印刷物の前書きや結語が示しているのは、見本市通信の執筆をAitzingとは違ったものと理解していたこと、つまりKempenのイメージに調和していたことを示している」(Körber同上.)。また、「Riephanは、年代記のニュース提示や文体に拘ることはなく、…即時性を保証するような…手書き通信特有な日付の行も付けて」、即物的な手書き通信のスタイルをとった (Körber同上. 2016, 60.)。こうしたことから、見本市通信に対する発行人Kempenが定期的なニュースの総覧という形の印刷物を望んでいたことが透けて見える。

競合の発生

すでに触れたとおり1583年の最初の見本市通信に位置づけられる„RELATIO HISTORICA“が商業的な成功を収めると、当然二匹目のドジョウを狙う者が多く現れた。Aitzing自身でさえ後に発行、印刷のパートナーを取り替える事態に至ったように、文字通り生き馬の目を抜くような状況が現出したであろうことは、表1が示す発行状況の一部を見ても納得の行くところである。ただし、ここで問題にすべき競合は1588年前後の状況である。ケルンやフランクフルトの市当局の印刷物の監督などが影響する中でも、複製や剽窃などは起こりえた。よく売れたものほど、複製や剽窃の対象にされやすいのは言うまでもない。先に紹介したバーゼルでの印刷物などの存在は、類似の印刷物の存在を暗示しているともいえる。もちろん1590年以後になると、競合状況が誰の目にも明らかになる。Bender (1994) の目録でも見本市通信の出版を巡る競合状況を端的に示す例を確認できる。一番先に挙げられるべき例が、フランクフルトでの筆名Jacobus Francusの編集による一連の見本市通信の成功であろう。AitzingもFrancusの見本市通信を編集方針や背景となる宗派の問題もあり激しく批判したが、競合相手の出現は、Aitzingにいわば「本家」としての見本市通信の維持を強く意図させたであろう。

Aitzing自身の経済的理由

競合の出現とも相俟って最大の理由と考えられるのは、もちろん「Aitzingが主に著述業によって家計を賄っていた」ことで、本来各号で完結していたはずの見本市通信を継続させた一因となっていたであろう (Rosseaux 2004, 115.)。「ケルンでの生活は容易ではなく、1592年選帝侯エルンストに仕えることになったにしても、そうした状況で、売れ行きの良いと分かっている見本市通信のような制作物を自ら放棄するなどということは意味がない」という指摘は説得力がある (Rosseaux 2004, 115.)。

4.1.4 発行の継続性以外の変化

報道対象の地理的拡大

「継続的な刊行形態への移行とともに、Aitzingの見本市通信の内容上の多様性も広がった。…1588年春までに刊行された4号までは、オランダとラインラントの出来事が中心であった」が (Rosseaux 2004, 115f.)、それ以降、ヨーロッパ西部、中部、南部のすべての諸国、バルチック海沿岸諸国なども取り上げられている (Rosseaux 2004, 116.)。

発行間隔の定期化とその変化

「1588年以降…発行間隔はますます短く、規則的になっていき、発行リズムが安定していった。…1588年から1593年の間は毎年2回の発行となり、その後はまた発行頻度が、秋の見本市に合わせた年一回に落ちた」 (Rosseaux 2004, 116.)。この発行頻度の鈍化の原因として、Rosseaux (2004, 116.) は二つを推測している。一つはAitzingが60代半ばを超えた高齢だったことであり、もう一つは競合する複数の見本市通信の出現である。1590年にはストラスプールのTobias Stegerが³、1591年にはJacobus Francusの筆名で最初のフランクフルト制作の見本市通信が刊行された (Rosseaux 2004, 116f.)。後者に対して、Aitzingは怒りを覚えたようで、「何度も彼自身の見本市通信の前書きでフランクフルトの模倣を激しく批判し、内容上の誤りや宗派上の先入観も非難している」 (Rosseaux 2004, 117.)。1596年と1597年の春 (Aitzing自身が見本市通信を発行しなかったタイミングを見計らって) には、ケルンでさえ模倣者が⁴、前年秋のAitzingの記述を土台に新しい情報を書き加える形で見本市通信を発行した (Rosseaux 2004, 117.)。

刊行頻度と速報性の否定

半年ごとという刊行リズムは速報性・即時性という点で新聞に劣り、コメントし、評価する機能の点ではパンフレットに及ばず、テキストと画像との共存という点では、銅版画を添えたイラスト付きチラシに見劣りしたはずである (Rosseaux 2004, 119.)。しかし「見本市通信のこの伝来の形式に読者層がいかにか馴染んでいたかは、1693年にライプツィヒで毎月発行された見本市通信がわずか数号で中断されたことが示している」 (Rosseaux 2004, 119.)。ライプツィヒの実験が失敗した後に、編集人は、「この世界での出来事は、一ヶ月間で多くの注目すべきことを見つけ、記録することができるほど、その経過が速いということは決してなかった。そのためにこの種の最良の話もバラバラになってしまい、読者の願望も、一つの場所から次の場所へと遷り、そ

れを調べようとすれば、たいていは倦みはてしてしまうかのようだ」と弁明している (Rosseaux 2001, 109.)。

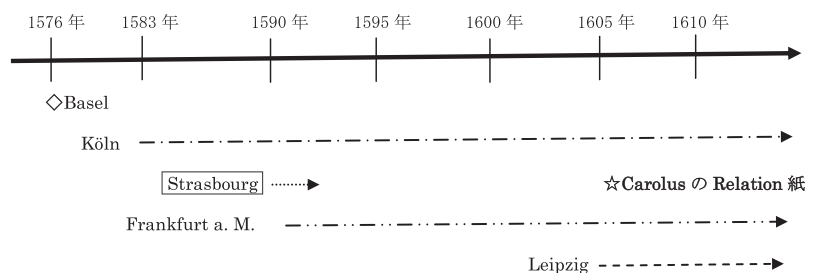
継続性に起因する情報の真実性の希求

Rosseauxは「Aitzingが³見本市通信のニュースをどう評価し、編集するのかわかる」と述べている (Rosseaux 2004, 110.)。すなわち、アンリ4世軍の勝敗とアンリ4世自身の生死それぞれについて矛盾する三種類の情報が1590年春の見本市通信の入校直前に入信したが、これらすべてを掲載し、「真実の母である時に判断を委ねる」という態度表明を前書きに記したのである (Rosseaux 2004, 110.)。同年秋の見本市通信では、事件の顛末を伝えることができるようになって、「歴史的政治的な関連状況の知識なしに当該個別ニュースは理解できない」として、「見本市通信の半分以上のスペースを割いて、フランスでの出来事に関するニュース」を伝えた (Rosseaux 2004, 111.)。また、別の号の見本市通信では、Aitzingが前号での誤報に謝罪するということが前書きで確認できる (Rosseaux 2004, 111.)。これらは「現代ジャーナリズムの注意義務の概念に含まれること」で、「16、17世紀に人気のあった歴史概論書の伝統」や「Sleidanの数多い連続コメント」に類すべきものともされている (Rosseaux 2004, 111.)。

5 | 意図せざるメディア類型の成立

Rosseaux (2004, 119.) は、こうした経過をまとめて、「見本市通信が最初から意図された結果ではなく、…16世紀末の情報・メディア市場における需要と供給とのダイナミズムに関連づけられた数年間のプロセスの産物である」と述べている。広義の即時性や定期性に関連して、「Aitzing自身にとっては、今日の観点から重大な定期的な刊行様式への一歩がどうやら重要性として認識できるものではなかった」のである (Rosseaux 2004, 119.)。これは手書き通信を印刷する形で配信するというカロルスの1605年の無自覚な思い付きを連想させる。

■ 図1 見本市通信の主要発行地とその発行年代の分布



Rosseauの結論は、「見本市通信を…定期性、真実性、報道の簡潔性という性質をもった…近世の独自のメディア形式」とし、時代の要請に逆行するような印象を与えるが、「見本市通信は歴史を刻むほどにその歴史編年記的な性格が前面に強く表れた」ものの、それこそが、見本市通信を18世紀まで生き永らえさせた要因だと考えている (2004, 123.)。

小論では、同時代の歴史記述という一面と過去6か月に限定された事件報道とその整理解釈という見本市通信の両義的な機能を辿ってきた。見本市通信の受容についての事実関係の整理と考察を進める必要があるものの、最後に週刊でスタートした印刷新聞との関連についても付言しておきたい。購読の対価という点では、手書き通信が群を抜いて最も高価で、次いで週刊の印刷新聞、年に二回だけの見本市通信、頻度が一定でもなく毎回購入する必要もないことから、パンフレットと一枚刷りが最も安価とされるであろう。受容者の識字能力を前提にする点で、手書き通信、印刷新聞、見本市通信、パンフレットは一線上に置くことが可能かもしれない。一枚刷りと言われるチラシは、図像によって識字能力の無いものにも受容されえたことも考慮すると、受容層がもっとも広いといえる。もちろん週刊新聞も小グループでの回覧購読が可能性としてあったことが知られているが、経済的な負担が如何ともしがたく付随する。図1も示す通り、週刊の印刷新聞は見本市通信の後に登場したことを見ると、週刊の印刷新聞は見本市通信の両義的な機能の一面を意図的に明確化するという使命と、手書き通信を『民主化』するという二つの機能を背負って発生したとも言えるかもしれない。

見本市通信に関するドイツでの研究を見てきたが、なぜ見本市通信の規定自体に困難を覚えるのかについて最後に検討してみたい。以下の1603年にフランクフルト近郊オーバーウルゼルでAndreas Striegelにより編集、発行された見本市通信のタイトルを示す。これは前書きとか目次ではなく、歴とした表紙ページのタイトルである。

<p>Relationes Historicae Das wahrhaftige Beschreibunge aller Gedenckwürdigen Sachen/so sich hin und wider in ganz Europa/als nemlich in Teutschland/Holl-, See-, und Engellandt/Österreich/Ober- und Niderungern/Sibenbürgen/Walachia/Moltaw/Polen/Preussen/Hispania/Frankreich/Italia/Savoia/vnd an etlichen Orten in Türken Von der Herbstmeß Anno 1602 biß auff die Ostermeß Anno 1603 zugetragen und begegben haben: /sampt einen Bericht etlicher Türkischer und anderer in Teutscher Sprach unbekandten Namen/welchen vund Ampten.</p>	<p>歴史報告 あらゆる記憶すべき事柄の真正なる記述／すなわちドイツ、ホラント、ゼーラント、イングランド、オーストリア、上部・下部ハンガリー、ジーベンビュルゲン、ワラキア、モルダヴィア、ポーランド、プロイセン、スペイン、フランス、イタリア、サヴォイア、トルコのいくつかの地のようなヨーロッパ全体のあちこちで、1602年秋の見本市から1603年復活祭の見本市までに起こり、繰り広げられたことども／いくつかトルコとドイツ語ではいまだ知られていない名前や地位の知らせも含めて。</p>
--	---

このタイトルが物語るのは、見本市通信は名前が無いままで売りに出された印刷物だということである。Behringerも指摘するとおりカロルスのRelation紙が製本された際の表紙の構成はほぼこれに準じていて、両者の連続性を強く感じさせる。報道内容の信憑性にはまだ留保がつくものの、「読者が何を知りえたか、…何が重要であるのか、あるいは何が興味深いと受け取られ、「世界についての知識」として入手可能だったのか」を見本市通信は示している。換言すれば「近世のニュース価値の基準を明らかにして」（Körber 2016, 26.）、「ニュース選択の基準もニュースの評価も」、200年に及ぶ見本市通信を追及することで通時的な変化を追及することも可能かもしれない（Körber 2016, 27.）。

参考文献

- 江口 豊 (2014) 「活版印刷術の展開と新聞成立との関連について」(研究ノート)『メディア・コミュニケーション研究』 67, 1-22.
- 江口 豊 (2016) 「フッガー通信について」(研究ノート)『国際広報メディア・観光学ジャーナル』 23, 57-77.
- 江口 豊 (2017) 「手書き通信の成立と拡散について」(研究ノート)『メディア・コミュニケーション研究』 70, 37-58.
- Behringer, W. (2003) *Im Zeichen des Merkur. Reichspost und Kommunikationsrevolution in der Frühen Neuzeit*. Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen.
- Bender, K. (1978) Eine Meßrelation Michael von Aitzings und Herzog Heinrich Julius. Der Anlaß für eine Intervention des Wolfenbütteler Hofes in Köln im Jahr 1590. In: *Wolfenbütteler Notizen zur Buchgeschichte* III, 286-289.
- Bender, K. (1987) Die deutschen Meßrelationen von ihren Anfängen bis zum Ende des Dreißigjährigen Krieges. In: *Presse und Geschichte*. Saur Verlag, München, 61-69.
- Bender, K. (1994) *Relationes Historicae. Ein Bestandsverzeichnis der Meßrelationen von 1583 bis 1648*. Walter de Gruyter, Berlin/New York.
- Benzing, J. (1961) Der Zeitungsschreiber Michael von Aitzing und der braunschweigische Hof. In: *Archiv für Geschichte des Buchwesens*, 3, 1621-1626.
- Glüer, J. (2000) *Messrelationen um 1600 – ein neues Medium zwischen aktueller Presse und Geschichtsschreibung. Eine textsortengeschichtliche Untersuchung*. Kümmerle Verlag, Göppingen.
- Körber, E.-B. (2013) Das Selbstverständnis Michaels von Aitzing nach dem Zeugnis seiner deutschen Messrelationen. In: *Jahrbuch für Kommunikationswissenschaft*, 15, 5-27.
- Körber, E.-B. (2015) Zur bibliographischen Erfassung von Messrelationen. In: Stöber, R./Nagel, M./Blome, A./Kutsch, A. (Hrsg.) *Aufklärung der Öffentlichkeit – Medien der Aufklärung*. Franz Steiner Verlag, 11-22.
- Körber, E.-B. (2016) *Messrelationen. Geschichte der deutsch- und lateinischsprachigen „messentlichen“ Periodika von 1588 bis 1805*. edition lumiér, Bremen.
- Rosseaux, U. (2001) *Die Kipper und Wipper als publizistisches Ereignis (1620-1626). Eine Studie zu den Strukturen öffentlicher Kommunikation im Zeitalter des Dreißigjährigen Krieges*. Duncker & Humblot, Berlin.
- Rosseaux, U. (2004) Die Entstehung der Messrelationen. Zur Entwicklung eines frühneuzeitlichen Nachrichtenmediums aus der Zeitgeschichtsschreibung des 16. Jahrhunderts. In: *Historisches Jahrbuch*. Vol. 124, 97-123.
- Stalljohann, M. (2011) Der Kaufmann im Fokus der Meßrelationen. In: Bauer, V./Böning, H. (hrsg.) *Die Entstehung des Zeitungswesens im 17. Jahrhundert: Ein neues Medium und seine*

Folgen für das Kommunikationssystem der Frühen Neuzeit. edition lumiér, Bremen, 115-134.
Stieve, F. (1881) Ueber die ältesten halbjährigen Zeitungen oder Messrelationen und insbesondere über deren Begründer Freiherrn Michael von Aitzing. In: *Abhandlungen der historischen Klasse der königlichen Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, 16, 177-265.

(平成29年4月19日受理、平成29年5月12日採択)